

2019 台湾雅楽公演

公益社団法人 北之台雅楽アンサンブル

理事長 井口陽一郎

令和の新元号を間近にした2019年4月9日より11日にかけて実施しました台湾雅楽公演は、私ども北之台雅楽アンサンブルにとって台湾において初めての公演でした。実施に際しまして、公益財団法人日本台湾交流協会様より助成をいただきましたことを衷心より御礼申し上げます。また、台湾各都市の主催団体の皆様のご高配に厚く感謝申し上げます。お蔭をもちまして、高雄・台南・台北三都市四公演の全てが順調に行われました。

今回の台湾公演は、元宮内庁楽部首席楽長・安齋省吾先生にご同行頂き、総勢22名の楽団となりました。日本から最も近い隣国として、経済・文化交流が盛んに行われている台湾は私どもにとって大変身近で、親近感もあり、団員一同落ち着いた中で公演をすることが出来ました。特に、私たちの稽古場がある千葉県いすみ市には、蒋介石の「以德報怨」の記念碑が建立されており、蒋介石ゆかりの地としても知られ、台湾とのご縁も感じておりました。

「公益社団法人北之台雅楽アンサンブル」は、1982年に千葉県いすみ市に任意団体として発足し、元宮内庁楽部首席楽長・故東儀文隆先生にご指導をいただいてまいりました。爾来、いすみ市を活動拠点に、千数百年に及ぶ長い伝統を持つ日本の古典芸術として、ユネスコの無形文化遺産にも登録され国際的に高い評価を受ける「雅楽」を通して、国際文化交流及び青少年の情操教育に資することを願いに活動しております。現在は安齋省吾先生に師事し、一同日夜技術の向上に励んでおります。

1998年アメリカ公演、2000年のオーストラリ

ア公演、そして2005年には、初の国際交流基金助成事業として「EU市民交流年」を記念した欧州五カ国雅楽公演（フランス、ベルギー、オランダ、ルクセンブルグ、ドイツ）を行い、次第に海外公演を行う機会が増えてきました。2011年7月に一般社団法人として法人化登録をし、翌年2012年11月には内閣府より公益認定を頂き、今日に至っております。現在まで、計5回、国際交流基金の助成プログラムとして、日本政府が主催する修好年記念事業において雅楽を紹介する光栄に預かりました。本年7月には、6回目の国際交流基金助成プログラムとなる、日本オーストリア修好150周年及び日本ポーランド修好100周年記念公演を予定しております。

また海外の大学機関等において雅楽ワークショップも数多く行い、海外の学生達に雅楽を紹介しています。一方、日本国内では、地元千葉県の委託事業「伝統芸能・洋楽～ふれあい体験事業」等、小中学校等の教育機関における雅楽紹介活動の他、地方公演を開催し、次代を担う若手人材の育成にも取り組んでいます。

この度の台湾公演は、ベルギーで知己を得ました台湾政府外交官の劉氏より、台南国立芸術大学施徳華教授と夫人の高雄・文藻外語大学フランス語学科・盧安琪教授をご紹介いただいたのがきっかけでした。昨年1月に事前打ち合わせの為に訪台した際、施教授ご夫妻に台南国立芸術大学で初めてお目にかかりました。施教授は、「日本の雅楽を是非台湾に紹介していただきたい。私は中国の伝統音楽を研究していますが、中国の伝統音楽、特に唐楽の影響を受けて日本で大成された雅楽を学ぶことは、台湾の自国文化の研究にも繋がります。

す。唐楽は中国にも、台湾にも残された資料がなく、日本の雅楽にその足跡を見ることが出来るのみです。是非台湾にお出でいただき、学生達に間近に雅楽に触れてもらいたいのです。」と強く語られました。台湾における雅楽紹介の意義を確信し、台南国立芸術大学での公演をお約束致しました。

そして、施教授から「一人とても重要な方を紹介したいのですが。」と言われ、台湾政府文化部に所属する台北国立伝統芸術センター館長の呉榮順教授をご紹介いただき、翌日台北にある同センターで呉教授にお会い致しました。呉教授は、「台湾の人は日本の雅楽を尊敬しています。是非、台湾の音楽界を代表する国楽団と雅楽のコラボレーションを通して、交流しましょう。出来れば雅楽の曲を国楽団とコラボレーションしましょう。雅楽曲をこちらで編曲します。」と台北での雅楽公演を強く願われました。後日検討の結果、雅楽曲の中で最も良く知られている「越殿楽」をコラボレーションすることで決定しました。以後、一年間の準備も順調に進み、今回の台湾公演の運びとなりました。

本年4月9日成田空港より楽団一同、高雄へと出発し、翌4月10日に文藻外語大学公演となりました。同大学は、クリスチャン系の私立の外語大学で、日本語学科は1,000名を超える学生が登録しており、日本語で挨拶される学生がとても多かったのには驚きました。公演には、同校学生・教員及び近隣の一般市民に広く呼びかけられ、同大学学長、副学長、高雄市の有識者始め、約400名もの来場者がありました。司会は、同大学日本語学科教授が担当され、舞台設営、場内案内は学生達に手伝っていただきました。通訳をして下さる学生もあり、運営者側とのコミュニケーションもとてもスムーズに行うことが出来ました。

今回の台湾公演は、二部構成で管絃二曲、舞楽二曲の構成としました。第一部は、春に相応しい



〈文藻外語大学・化雨堂ホールにて管絃演奏〉

双調の曲を選曲しました。双調というのは、唐楽の六調子の一つで、基音が洋楽のG音に相当する調子のことを言います。その中より、軽やかなリズムと柔らかな旋律の明るく優美な「柳花苑」と、流麗な旋律をもつ「陵王」を選曲しました。第二部では、舞楽曲の中でも代表的な左方四人舞の緩やかな舞である「甘州」と、同じく左方の走舞である勇壮な「陵王」を紹介しました。「陵王」は「蘭陵王」とも称し、舞楽曲として非常に有名です。双調「陵王」の原曲です。中国の南北朝時代、北齊の蘭陵王長恭は容姿が大変美しく、兵の士気を高めるため、戦いに臨む時は常にいかめしい面をつけ勝利したという故事により作られたといわれています。

学生達より、初めて触れる雅楽に対して感動の



〈舞楽「陵王」〉

声を多くいただきました。文藻外語大学公演の実現に尽力された盧安琪教授より、「素晴らしい公演をありがとうございます。学生達も憧れの日本の伝統音楽に触れることが出来、大変感動しています。」と好反響をいただきました。

二日目の4月11日は、台南国立芸術大学公演。台湾国内にある三つの国立芸術大学の一つで、教員・学生とも全寮制で、英才教育に対する評価が高い大学です。公演では、中国音楽を専門にする学生及び教職員約200名が集いました。中国の伝統的な楽器に親しんでいる学生だけあって、雅楽の楽器には興味津々。皆さん真剣な眼差しで、雅楽曲に見入っていたのが印象的でした。

運営は中国伝統音楽を専門とし、今回の雅楽招致に尽力された施徳華教授が行い、司会は同大学の日本語が流暢な准教授が務められ、万全の受け入れ体制でした。日本の琴を習得され、毎年来日されている民族音楽専門の施徳玉教授は、台南市で初めて雅楽公演が実現したことに謝意を述べられ、今後雅楽との交流を切望されました。

4月12日、台南より約300Kmの距離を専用バスで一路首都台北へ移動。午後には早速、国立伝統芸術センターに於いて台湾国楽団とのコラボ曲「越殿楽」のリハーサルを行いました。台湾国楽

団は、台湾政府文化部の管轄にあり、ベトナム国楽団や韓国国楽団など多くの国々と音楽を通じた交流を重ねている国立の由緒ある音楽団です。張佳韻教授の指揮の元、60名の国楽団員と何度もリハーサルを重ねました。特に、雅楽には、序破急という独特なリズムがあります。最初はゆっくりと、そしてだんだんにテンポが速くなっていくのが特徴です。最初はお互いに戸惑いもありましたが、練習を繰り返すうちに、雅楽のリズムにピッタリと合ってきました。洋楽にも詳しい安齋先生のアドバイスもあり、見事に調和されたコラボレーションを実現することが出来ました。

そして迎えた4月13日、同センター大ホールにおける公演一日目。初日は雅楽のみの公演でした。高雄、台南と同じ演目を紹介させていただき



〈台北国立伝統文化センターにて管絃演奏〉

写真国立伝統芸術センター提供



〈台南国立芸術大学ホールにて〉

左から、施徳玉教授、井口陽一郎理事長、安齋省吾先生、施徳華教授



〈舞楽「甘州」〉

写真国立伝統芸術センター提供

ました。会場は、430席が満席となりました。国立の劇場である同ホールは舞台、照明、録画ビデオ撮り、運営と多くの劇場スタッフにより万全の体制で公演は運営されました。司会は、日本語が流暢で、日本文化にも明るく、京都大学で学位を取得された王女史が担当。観客は、雅楽を堪能され、大喝采をいただきました。

4月14日(日)の二日目も、同じく満席となり、国楽団による「古木の記憶」の演奏から第一部がスタート。作曲は、日本人作曲家である櫻井弘二氏。続いて、国楽団との「越殿楽」コラボレーションです。国楽団による演奏は、越殿楽の雅楽曲を全く邪魔することなく、それどころか中国楽器によるオーケストラが静かに、大きく雅楽曲を包み込んでくれました。そして曲の終わりには迫力のあるエンディングで盛り上げていただきました。両楽団員から、演奏しながらも素晴らしい音響の調和に感銘したとの声が多く届けられました。日台両文化の見事な融合の瞬間でした。会場からは万来の拍手をいただきました。

第二部は、冒頭、神楽舞「浦安の舞」を紹介しました。この曲は、紀元2600年(昭和15年)の奉祝の祭典のため、時の宮内庁楽部楽長の多忠朝氏が、昭和天皇の御製「天地の 神にぞ祈る 朝なぎの 海のごとくに 波たたぬ世を」に作曲、



〈神楽舞「浦安の舞」〉写真国立伝統文化センター提供

振り付けをされたものです。「浦安」とは心の安らかという意味で、平和を祈念して作られた舞です。日本女性の第一礼装である十二単様式の五節の舞装束を纏い、厳かに舞われます。この厳粛かつ華麗な舞に会場の拍手は止みませんでした。

続いて、国楽団による「春風幻想曲」「藍色的思念」が演奏され、最後アンコールに応じて、台湾で誰もが口ずさむというテレサテンの代表曲「月亮代表我的心」でフィナーレ。楽屋で聴き聞いていた私たちも心が和む演奏でした。

公演後の両楽団の懇親会には、台湾政府文化部政務次官・蕭宗煌氏及び国立伝統文化センター館長・陳濟民氏、国楽団団長・劉麗貞女史がご同席。蕭政務次官は、「今回のコラボレーションは、両国の芸術交流の象徴として大変意義深い公演となりました。」と賛辞され、陳館長からは、来年千葉県いすみ市で開催予定の国楽団日本公演を「2020年東京オリンピック祝賀行事」と位置づけ、さらなる交流を深めたい由、言及されました。

この度の台湾公演は、雅楽を通じたアジアとの交流の第一歩が刻まれたという意味で、大変意義の深い公演であったと思います。来年2020年は東京オリンピックの年となり、同5月22日に、台湾国楽団の皆様を、地元いすみ市にお迎えし、岬



〈管絃「越殿楽」 国楽団とのコラボレーション〉
写真国立伝統芸術センター提供



〈懇親会にて〉前列左4人目より、陳濟民氏、蕭宗煌氏、井口陽一郎理事長夫妻、安齋省吾先生。
写真国立伝統文化センター提供

ふれあい会館（収容 800 名）において、台北国立
伝統文化センター、いすみ市及びいすみ市教育委
員会の共催として、千葉県と台北駐日経済文化代
表処台湾文化センターの後援をいただき「台湾国
楽団と雅楽のコラボレーション」公演を開催しま
す。この度の台湾公演の感動をそのまま、日本に
おいて再現できますことを地元関係者は心待ちに

しております。隣町の一宮町の釣ヶ崎海岸では、
オリンピック初のサーフィン競技が開催され、近
隣市町村も協力体制が整い、外房地域全体がオリ
ンピックに盛り上がりつつあります。来年のいす
み市公演が、日台親善交流の一助となりますこと
を切に願っております。ありがとうございました。